JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	未来学の考古学
Author(s)	吉澤，剛
Citation	年次学術大会講演要旨集，27: 795-798
Issue Date	2012-10-27
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/11141
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

２Ｈ０７

未来学の考古学

○吉澤剛（大阪大学）

未来学は、それがかつて遠い未来として展望していた 21 世紀の今となっては、もはや懐かしいという形容詞しか見当たらないかもしれない。だが、その記憶すらない年代にとっては、むしろ未来を見るのと同じぐらい遠い先のことである。考古学は主に文献以外に人類が残した痕跡を研究し、人類の活動とその変化を研究する学問を指す。したがって、未来学が現代にまで遺したものを探究することが研究の主眼である。本稿ではその予備的段階として、未来学とは何だったのかについて歴史学的分析を試みる。

1. 祭りの 10 年

日本における未来学の源流は、経済審議会による「日本経済の長期展望」とも、国内初の世界デザイン会議とも言われているが、それらは 1960 年のことである。東京五輪を経た翌年の 1965 年、大阪万博の開催が 9 月に決定。同年秋から日本で未来研究熱が湧き、年末から欧米の未来論の著作が雪崩を打つように紹介され、未来論は濃厚な楽観的色彩で覆われるようになった（謝 1967）。1966 年、経済企画庁経済研究所長の林雄二郎は庁内の「ビジョン研究会」の中心メンバーとして『20 年後の日本：豊かな国民生活への一つのビジョン』という報告書をまとめた。この年の 11 月に林と社会評論家の加藤秀俊、建築評論家の川添登、関西から民族学者の梅棹忠夫と SF 作家の小松左京を加えて雑誌『Energy』の座談会が開かれた。この未来学の特集号が 1967 年 4 月に公刊、さらに『未来学の提唱』という書籍として 7 月に出版された。この五人による集まりは未来学研究会（通称「貝食う会」）と呼ばれる。彼らは「万博を考える会」のコアメンバーともなり、自由闊達な議論は大阪万博という未来学の具現化へと向かっていった。

会の影響力はこれにとどまらない。1967 年 9 月に林・加藤らがオスロで開かれた第 1 回国際未来学会に参加、勢い次回を日本で開催することを宣言してしまう。そこで一橋大学名誉教授で経済学者の中山伊知郎に相談し、主催母体となる日本未来学会を 1968 年 7 月に発足させる。11 月に林を副団長とする産業予測特別調査団が訪米し、テクノロジーアセスメントやシンクタンクといった言葉を持ち帰り、メディアに広く注目される（吉澤 2009）。その興奮覚めやらぬまま 1970 年 3 月からは大阪で日本万国博覧会が始まり、4 月には京都で第 2 回国際未来学会が開かれた。さらに 8 月には実行委員長を小松左京とする国際 SF シンポジウムも開催。小松の言葉を借りれば、百花斉放の「問題提起の揺籃期」に一段落をつけた、という感が強い（小松 1970: 47）。ここで 1965 年からの未来学ブームは頂点を迎え、時代の変動とともに以後急速に収束していった。1970 年 11 月に開かれた公害国会によって環境・公害問題が改めてクローズアップされ、ニクソン・ショック（1971）、あさま山荘事件（1972）、オイルショック（1973）などを経て、世間の関心はイデオロギーから生活へ、大きな物語から小さな物語へと推移していった。1980 年代以降の国家の長期ビジョンもそれを追認する形を採った（田原 2011）。それは学際的で大局観をもった未来学が、各学問分野へと発展的解消していった過程とも見ることができる。

2. 未来学の日本的条件

未来学とは何か。1967 年 9 月に日本経済研究センターの主催により東京で開かれた未来学国際会議では、未来の危機に対して「早期警報システム」が必要であり、その上で「未来を計画し、発明する」ことの可能性が探究された（大来 1967; 香山 1967b）。これを受け、坂本二郎は長期予測、警告、提案を三位一体として行うものが未来学であると端的に定義する（坂本 1968）。

しかし日本は、国としても個人としても、これまで未来を考えることをほとんどしてきていない。これは日本人が未来否定観を持っているためであり、それが「なんとかなるだろう」という楽観論と「なるようにしかならない」という悲観論を生み出している（林 1967）。日本の未来学を流行させる間接的条件は「未来が予測できる」という自信であり、直接的動機は現在への不満と将来への不安である（原 1970）。自信を支えるものは未来学者ハーマン・カーンが日本を 21 世紀の先進国と称賛した経済成長と情報産業の進展であり、不満と不安をもたらすものはその歪みとしての健康や環境、生活への悪影響であった。

日本の未来学は、会社中心主義という形での新しい集団主義の中で組織と人間が問題にされ、質的課題もアジアにおける唯一の先進国としての責任の自覚に力点が置かれているという指摘がある（河村 1970; cf. 武者小路 1969; 内田 1969; 北 1970）。日本の文化的特性として「計画」に価値が置かれているため、個人行動よりも集団行動の方が目的や計画を実現させる上で有効であるという考え方が出てくる。

こうなると、自分一人で何かしようという目的を立て、それを実行するよりも「他人が将来どう動くだろうか」を予想して自分もそれに応じて動くようにするという個人が増加する。このような現象は将来に対する不確定性への焦りとなり、主体性が確立できないという不満ともなる（原 1970）。それは未来学に対しても、過去から一貫して流れている民族精神から高度な文化精神を開発するところに使命があり、汝自身を知ることから日本の「集団」のあるべき未来を形成すべきだと国粋主義者をして言わしめることとなった（曾田 1968）。こうして、日本の未来学は集団とその現在に縛られるようになった。

3. 人間性の回復

未来学に対する批判は、操作可能な未来という社会工学的思想に向けられた。いわく、一時代前の技術万能主義的楽観論の産物だったものが、逆に技術恐怖的悲観論の思想として生じ、ここに「未来」の語を冠して、新しい装いを凝らしている（日高 1967）。また、人間はどのように自覚的に生き、未来をみずからの手で切り拓くかという主体の問題がその思想から決定的に抜け落ちている（針生 1967）。中山伊知郎も、行き詰まった人間の社会を打開したいという欲求が未来研究を貫く精神であるとしながらも、不幸にしてこの産業社会で人間がどのような生活の地位を占めるか、人間の価値意識の転換についての論及に乏しいことを嘆く（中山 1967, 1968; 中山・大河内 1970）。

人間中心的な未来学として、他ならぬ経企庁の審議官が最も日常的な市民感覚を代弁している。「サラリーマンにとって未来が問題なのは、産業がどうなるかでなく、自分の会社がどうなるか、会社での自分の仕事の内容がどうなるかであろう」（宍戸 1968: 114-115）。工業化社会が進むにつれて、勤労大衆が人間疎外から回復し、どう生きがいを持てるかに関心が集められている。しかし未来学はそれに対して沈黙しているという不満が企業家からは強く示された（前田・星野 1970）。1970 年の国際未来学会でも未来予測等の技術志向型と人間志向型の見解が二つの相異なる大きなアプローチであるとされたものの、後者については欧米の論客が主に議論を展開し、日本の論者は少なかった（桜井 1970）。同時期に未来学と情報化社会の先導者であった林（1970b）が選択的機能を拡大させた人間社会の展望を描くと、未来学の直面する大きな壁が見え始めた。

4. 目的的デザイン

それに早くから気づいた者もいた。貝食う会の五人にあって、ほどなく川添登はある種の違和感というか、構想や計画を唱える未来学の主流から外れているのではないかという思いを記している（川添 1967）。座談会でも、「未来工学」を提唱する林に対し、それは合目的的であるので、未来学は目的的なものを含んだデザイン学であると川添は返す（梅棹・加藤・川添・小松・林 1967）。世界デザイン会議の開催にあたり、川添をはじめ浅田孝、菊竹清訓、黒川紀章、栄久庵憲司、粟津潔、大高正人、槇文彦らによって「来るべき社会の姿を、具体的に提案するグループ」としてメタボリズム・グループが結成された。それは日本人の思想と方法を生成流転という言葉で捉え、欧米の計画の思想に対抗して、世界デザイン会議に出席する海外デザイナーを迎え撃ち、同時に政府の手によって上から行われる計画に対して、下からの抵抗の姿勢を示そうというものである。川添はこれを応用未来学とみなし、1967 年 7 月に日本科学技術連盟が開催した未来学シンポジウムにおいて、構想・計画の未来学に対して、適応の未来学を提唱した。しかし同じメタボリストでありながらモダニズムの旗手であった槇文彦は環境計画の観点から操作可能な未来観を提示するなど、グループ内でも見解が一致していたわけではない（槇 1967）。

川添に関しては、小松左京が述懐するもう一つ興味深いエピソードが残されている。大阪万博で公害問題について触れていたのはスカンジナビア館ただ一館だったということはよく知られているところである。実を言うと、もう一つ扱おうとしたパビリオンがあり、それはテーマ館のうち川添が企画を担当した「空中テーマ展示部門」の第三セクション「人間と人間」の展示で、「マンダラマ」へと入っていく通路の両側を使って生物的環境の破壊に対する警告が表現された「矛盾の道」である。しかし最初の構想は監督官庁によって矮小化され、「残骸」と化したという（小松 1970）。

5. 終末論の大学

未来学で社会の目的を描くことが難しかったのには、社会運動という背景もある。安保闘争では、社会全体を全面的に否定し、現体制の破壊を目指しながら、新しい価値観の上に立った社会の青写真を示すことを拒み、継続的な闘争の各段階が次の闘争への展望を切り開いて行くとだけ答える。このラディカリズムは大学の理念、つまり西欧流ヒューマニズムを否定するという終末論的態度である（本間 1969; cf. 柳瀬 1967）。科学史家の広重徹は、学生運動が社会的要請に応える「役に立つ」だけの教育を拒否しようとしており、大学の産学協同や地域社会への貢献といった方向への大学改革を否定していることを問題視する。これはドラッカーの求める方向と大きく食い違っており、近代科学を絶対化する未来学はアナクロニズムに陥るほかないのではないかと批判する（広重 1969）。実際、応用社会科学としての未来学には大学が研究の本拠となるという未来は遺されていなかった。大学は転向者や官僚といった知識人を中心とした新たな「学」を受け入れることで、学問の自由を標榜しつつも知識に対するいさ

さか浅薄な態度を示すこととともなった。結局のところ、そうした学際的な学は大学においても当分の間、確たる地位を占めることはできず、大学人は副業として政府や社会において活躍する道を探っていたのである。

6. 政治の消去

政治学者の本間長世は清水幾太郎（1967）と香山健一を暗に指して、「安保闘争のただ中にあった者が未来学の先頭を切るようになったのは、一種の転向と呼ぶことができようが、それはいわば政治そのものからの転向であった。未来学には、ユートピア主義が持っている、社会からの政治の消去という側面があるからである」（本間 1969: 126）と分析する。実際、1968 年 7 月の雑誌『自由』の特集号は「未来学—現実化するユートピア」であり、林や香山など社会工学系の知識人からの論考で埋められており、そこで岸田純之助は、政策決定の未来学は人類を政治の暴力から解放すると断ずる（岸田 1968）。未来学は新しいユートピア思想のルネサンスと展望したのは、デニス・ゲイバー『未来を発明する』やロバート・ボグスロー『新しいユートピアンたち』の主張を紹介した香山健一であった。ユートピア的全体主義を否定したポパーは漸次的社会工学を提唱したが、香山は転向しながらもユートピア思想を捨てられなかったのだと言えよう。そしてそうした転向は一部の左派知識人たちには違和感なく歓迎されていた節もある（岩永 1967）。

1960 年の日本は平和宣言をし、覇権を求めない国として、世界に再登場できるという機会を得た。その中でメタボリズムは、非常に意味があったのではないか、その象徴が 1970 年の大阪万博での「お祭り広場」に表れている、と槇は振り返る（槇 2012）。同じように未来学も政治を消去したまま 1970 年に突き進む。1970 年の国際未来学会では、政治問題にはタブーのようにほとんど触れられなかったと言う（荒井 1970）。来るべき社会を高度選択社会（林 1970a, 1970b）と呼ぶにも関わらず、日本国民が遭遇すべき政治選択の重要課題については、現体制をそのまま肯定することを前提にしたような「受動的選択」しか与えていない。このような点が日本における未来学を期待外れなものにさせ、その不信を招いた根本的な理由であると見る者もいた（松本 1971）。畢竟、高度選択社会とは、国民に提供するサービスの種類を多元化する消費者主義という程度のものでしかなく、どのような科学技術を発展させ、どのような社会を目指すかという大きな物語については沈黙したままである。そして、PPBS とデルファイという、良構造問題を前提とした価値集約的な実践手法を挙げるにいたって、構想ないし計画の未来学を隘路に追い込んだ（cf. 加藤 1969）。

未来学者はマルクス主義の政治優先の使命感的発想から日常性の重視へという文脈で捉えているが、その脱政治的な未来像は技術官僚的であり、大衆の量的把握と人間性の疎外は排除されたマルクス主義者からの批判を招いた（堀口 1968; 河村 1969）。また、1960 年の安保闘争の余熱を鎮静させ、資本主義を展開させていくうえで未来学者が効果的な役割を果たしたと分析する（飯田 1969）。

マルクス主義も未来論もイデオロギーを否定して客観的な立場を自任するが、両者の言う「科学」は同根であり、イデオロギーを免れえないのではと批判する見方もあった（広重 1968; 解良 1969）。産業界にしてみれば、マルクス主義であれ未来論であれ、知識の仮面を被った壮大な空論に対する嫌悪もあったのかもしれない。香山は批判に応え、ウェーバーの事実と価値の峻別を通った上で、価値の問題に取り組みながら政策の科学化を推進していくことが未来研究であると言う（香山 1968）。しかし彼もそれを実現する具体的な手法については言葉を濁す。

7. 未来学を形にする

機を見るに敏な転向者や官僚に近しかった未来学者はいずれ高邁な理論をかざすことをやめ、社会工学や政策科学、生活学、民族学、建築学、NPO 学といった学際的な学の確立に向けて分散的に活動を展開していった。学会として、川添、梅棹、加藤、林らが創設に携わった日本生活学会（1972）のほか、梅棹は日本展示学会（1982）、林は日本 NPO 学会（1999）の設立にも尽力した。しかし、学術界での活動よりも、未来学を形にする器として最も注目されたのはシンクタンクである。産業予測特別調査団の訪米を受け、1970 年に民間シンクタンクの設立が相次いだ。時を同じくして通産省官僚であった平松守彦は、岸田らを巻き込み、より公益的なシンクタンクのあり方を模索する。ところが、この構想から外れたところで、半官半民のシンクタンクである総合研究開発機構（NIRA）が 1974 年に誕生する。これには田中内閣の「列島改造論」の実現、自民党政権による政治の安定、財界による脱工業化社会の模索が背景にあったとされ、岸田や梅棹も設立に携わった（小川 1993）。奇しくも同年にトヨタ財団が設立され、林が理事長に就任する。林のシンクタンク構想は 1971 年の未来工学研究所の設立に結実したが、他方でフィランソロピーや NPO といった公益機関の日本におけるあり方を探究し続けたことは、林にとって政治からの一定の距離を持ちつつも、実現可能な未来を構想できる主体の模索であったと言えよう。一方の NIRA は梅棹を迎え、ハコモノ行政と批判されながらも多くの文化施設の設立に携わった（中牧 2012）。そしてそれを支えたのは民間の文化系シンクタンクである株式会社トータルメディア開発研究所であり、株式会社 CDI であった。前者はメタボリズム・グループと小松左京が、後者は加藤秀俊と川添登が携わり、どちらも大阪万博直後に設立され、現在まで着実な経営を続けている。この一

方で、科学技術政策に関するシンクタンクについては、社会工学研究所（2003 年解散）、NIRA（2007 年財団法人化）、政策科学研究所（2008 年解散）など退潮が著しい。「空気を売る」シンクタンクに対して、建築などの形に見えるものだけが未来学を継承することができた、と言えるのかもしれない。それはデザインによって来るべき社会の姿を提案する実践である。そして、もう一つは SF である。2013 年夏には日本 SF 作家クラブ 50 周年を記念して、第 2 回国際 SF シンポジウムの開催が予定されているという（SFWJ50）。社会科学者だけでなく、建築家や SF 作家を交えた、真に領域横断的な未来学の構想は、未来社会と未来学の目的を取り戻すために、21 世紀の現代にもっと希求されてよい。それが次の時代の膂力となるはずである。

参考文献

會田軍太夫（1968）「明治百年と日本の未来学」『日本及日本人』**1457**: 30-33.

荒井忠男（1970）「『未来学』者の熱情と不安」『エコノミスト』**48**(19): 6-12.

飯田清悦郎（1969）「『未来学』を斬る」『月刊総評』**139**: 51-65.

岩永達郎（1967）「未来学についての覚え書—その周辺と全体的人間」『理想』**412**: 47-55.

内田繁隆（1969）「未来学の主要課題と第三世界の役割」『国士舘大学政経論叢』**11**: 21-56.

梅棹忠夫・加藤秀俊・川添登・小松左京・林雄二郎（1967）「なぜ未来を考えるのか」『Energy』**4**(2): 1-7.

大来佐武郎（1967）「西暦 2000 年の世界—未来学国際会議の成果と問題点」『朝日ジャーナル』**9**(43): 100-105.

桜井保之助（1970）「第一回国際未来学会議と未来学の今後の課題」『レファレンス』**20**(6): 142-148.

清水機太郎（1967）「未来とはなにか」『潮』**80**: 60-70.

小川和久（1993）『「頭脳なき国家「の悲劇」講談社。

加藤秀俊（1969）「未来研究の背景と方法論」『経済人』**23**(8): 25-29.

川添登（1967）「なぜ未来を考えるのか」『展望』**106**: 62-65.

河村望（1969）「『未来学』についての批判的考察」『日本の科学者』**4**(4): 10-15.

河村望（1970）「『未来学』の思想と日本の未来像」『文化評論』**100**: 48-59.

岸田純之助（1968）「管理社会における政策決定」『自由』**10**(7): 66-73.

北修爾（1970）「未来社会と人間」『通商産業研究』**18**(4): 100-113.

解良誠治（1969）「『未来学の神話』と現実」『アナリスト』**15**(1): 25-44.

香山健一（1967a）『未来学入門』潮出版社。

香山健一（1967b）「未来学研究の諸潮流」『経済セミナー』**140**: 16-22.

香山健一（1968）「政策科学の可能性について—『未来学』の貧困に答える」『経済セミナー』**145**: 94-99.

小松左京（1970）「万博から公害へ—未来学の新しい段階」『自由』**12**(12): 42-51.

坂本二郎（1968）「未来学と第三次文明の展望—日本の先進性について」『別冊潮』**8**: 57-93.

宍戸寿雄（1968）「産業構造の未来学」『別冊中央公論』**7**(4): 106-116.

謝世輝（1967）「日本的未来論を批判する—楽観的未来論への挑戦」『中央公論』**82**(12): 104-117.

田原敬一郎（2011）「日本の進路に関する長期ビジョン（国家ビジョン）」『日本の長期ビジョン策定の在り方に関する調査研究』新技術振興渡辺記念会委託調査、未来工学研究所、57-93 頁所収。

中牧弘允（2012）「梅棹忠夫の未来研究—教祖か予言者か祭司か？」小長谷有紀編『梅棹忠夫の「人類の未来」』勉誠出版、186-201 頁所収。

中山伊知郎（1967）「未来学と経済学」『経済セミナー』**139**: 2-9.

中山伊知郎（1968）「未来学と現代の危機」『中央公論』**83**(1): 50-75.

中山伊知郎・大河内一男（1970）「未来学を学ぶための五つのポイント—個人の幸福と社会の福祉を測る新しい基準」『潮』**126**: 112-125.

林雄二郎（1967）「未来学の日本的条件」『中央公論』**82**(5): 94-109.

林雄二郎（1970a）「未来学に欠けるもの—混迷する価値体系」『エコノミスト』**48**(1): 139-141.

林雄二郎（1970b）『高度選択社会—マルチ・チャンネル・ソサエティへの挑戦』講談社。

原ひろ子（1970）「日本における未来論流行の文化的基盤」『海外事情』**18**(1): 24-31.

針生一郎（1967）「機械の未来と人間の未来」『経済評論』**16**(10): 146-151.

日高晋（1967）「未来ブームの中の『未来学』」『展望』**105**: 54-57.

広重徹（1968）「"未来学"の貧困」『経済セミナー』**144**: 52-57.

広重徹（1969）「未来学批判」『別冊中央公論』**8**(2): 242-251.

本間長世（1969）「未来論と終末論」『中央公論』**84**(5): 126-136.

堀口牧子（1968）「未来学と変革の論理」『現代の理論』**5**(8): 104-113.

前田哲郎・星野芳郎（1970）「未来論の盲点をつく」『金属』**40**(臨増): 180-188.

槇文彦（1967）「未来都市と環境計画」『自由』**10**(7): 74-81.

槇文彦（2012）「メタボリストが語るメタボリズム」http://moriartmuseum.cocolog-nifty.com/blog/2012/01/5-acb7.html

松本博一（1971）「曲がり角の日本未来学—箱庭的思考からの脱却を」『エコノミスト』**49**(16): 166-170.

武者小路公秀（1969）「アジアの中の日本—一つの未来学的な展望」『心』**22**(5): 4-9.

柳瀬睦男（1967）「未来論のすき間」『世界』**260**: 176-183.

吉澤剛（2009）「日本におけるテクノロジーアセスメント—概念と歴史の再構築」『社会技術研究論文集』**6**: 85-91.

SFWJ50: 日本 SF 作家クラブ 50 周年。http://sfwj50.jp/